

山田みやこの活動報告

令和元年11月3日(日)

第6回生活困窮者自立支援全国研究会 一日目

場所 東北福祉大学国見キャンパス けやきホール

「困難の折り重なりに生きる人々に支援は届いているか?! (人の尊厳に根ざす)生活困窮者自立支援の価値(意義・意味)を問う」

4名の方からの提言

《自殺対策》

NPO法人自殺対策支援センター

ライフリンク代表 清水 康之氏

自殺者の多くは、日常的な複数の問題の連鎖で追い込まれ、自ら進んだものではなく生きる条件を剥奪され、命を守ることにさえ生きることができないプロセスがある。自殺の危機経路にはまり込んだ誰もが生きる道を選ぶために、必要な支援が進められているが支援の乱立により縦割りになっている。関係分野の連携が必要だ。

3つの提案

①地域自殺対策計画との連携

②連携支援のための相談票(つなぐシート)を使った連携

③自殺対策SNS相談により、相談にたどり着けなかった若者や女性を支援につなげる

自殺対策と困窮者自立支援事業の連動を高めて、包括的支援を一步踏み出したい。

《共生のまち創り》

社会福祉法人 ゆうゆう理事長 大原 裕介氏

北海道当別町にて、障がい者のある方や高齢者の支援、子育て支援など地域づくりに取り組んでいる。空き店舗を利用し、障がい児・者の一時預かりサービスの取り組みから、様々な困難を抱えた人たちの「見える化」を行い、相談窓口を設置し住民ボランティアなどの協力で、制度で使えないサービスを行っている。また小中高生に支援の在り方などを考えてもらう「学びの場づくり」も実施。子どもたちに共生のまち創りが価値ある仕事だと知ってもらい、将来、福祉や介護の人材不足解消につなげるために。

The collage features several key elements:

- Top Section:** Title '第6回生活困窮者自立支援全国研究交流会' and the theme '「困難の折り重なりに生きる人々に支援は届いているか?! (人の尊厳に根ざす)生活困窮者自立支援の価値(意義・意味)を問う」'. It includes a '1日目の報告' (Day 1 Report) section with a sub-headline '自殺対策' (Suicide Prevention) and a '通信3' (Communication 3) icon.
- Middle Section:** Three main articles with photos of speakers:
 - '共生のまち創り' (Creating a Community of Mutual Support) by 大原 裕介 (Hiroki Ohara).
 - '女性による女性支援' (Female Support by Women) by 橋本 真由美 (Mayumi Hashimoto).
 - '刑余者支援' (Support for the Leftovers) by 伊豆見 真史 (Masa Izumi).
- Bottom Section:** A '参加者の声' (Voices of Participants) section with a grid of small portraits and text boxes from various attendees, including 上原 なおみ (Naomi Uehara), 高橋 道実 (Michihiro Takahashi), 和田 京子 (Kyoko Wada), 和泉 京子 (Kyoko Izumi), 西条 亜希 (Aki Nishii), and 西条 亜希 (Aki Nishii).

《女性による女性支援》

NPO法人BONDプロジェクト代表 橋 ジュン氏

深夜、街を徘徊する10~20歳代の女の子に声をかけ、本人が望めば話を聞き関係性をつくり支援につなげている。家出した彼女たちは自分で解決しなければと思いき、犯罪に巻き込まれてしまう。主訴としてなかなか上がってこない貧困である。弁護士、児童相談所、女性相談センター、生活困窮者自立支援相談窓口などと連携し支援にあたっている。彼女たちへの支援が既存の制度ではマッチしない。家に帰れないけど学校に行ける。フルタイムで働けないけどアルバイトなどできるなど、彼女たちを応援できる制度があればいいと思っている。

《刑余者支援》

長崎地域生活定着支援センター所長 伊豆丸 剛史氏

罪を犯した人たちや高齢者の立ち直りを支援している。被告人の段階からも関わり、可法と福祉、行政と社会の狭間に陥った社会的弱者を支えるため、相談支援事業所をつくり、地方再犯防止推進モデル事業を進め、全国で活用できる官民協働のスキームを作った。就職前の医療・保健・福祉の学生同士が交流し、触法者への理解を深め分野を超えて連携できるイノベーションを感じている。

4名の活動はそれぞれ入り口は違っていても最終的には1つの方向に合流すると感じた。「自立のための支援」である。

第4回 生活困窮者自立支援全国研究大会 2019年11月4日 9:00

1日 目 報 告

「生活困窮者自立支援制度で誰かに支援は届いているか」

生活困窮者自立支援制度の現状と今後の展望

役員1~4を受けて、シンポジウムではそれぞれの経験から議論を促すのを行いました。報告者の山田田村さんは、犯罪の死傷を生かしながら制度化したことを説明、実践を広げていくこと、知らない、疑問のない支援を、困窮者支援だけでなく社会全体に向けていく必要性が求められていると発言しました。

自殺対策支援センターフリンク代表の橋ジュンさんは、自殺対策として、①自殺対策の枠組みづくりと、先進的な自治体のモデル化と未着手の自由の底上げ、②子どもの自殺の増加で、SOSの出し方の教育や自分の存在意義、モチベーションを生産性と幸福度につなげるという考えの議論、③支援者支援を行いました。

長崎地域生活定着支援センターの伊豆丸剛史さんは、自身の経験から「支援者が解りやない支援をするのではなく、社会のなかでつなげている時間を組み入れることが前提を減らす」と発言。また、「支援者側の信頼感で判断をする」と語り「地域に大人100人が関わるといい」と話しました。

社会福祉法人ゆうゆうの大原裕介さんは、本人と家族と支援者だけがつながり、サービスが提供されることに閉鎖を感ずる。地域全体で非社会をつくるうえで、「お会いさまがやるべき支援をデザインしたい」と発言。そのためには、「自分のやっている営みが社会的に意義があることを、企業などと協力して社会に発信していくことも必要」と提案しました。

BONDプロジェクトの橋ジュンさんは、「若い女性には、SNSを利用したアクティビティもしている。どんな状況の子ども相談に乗っていただけるのなら、どこでも連れて行って、全国の人と一緒に支援していきたい。義の世界、開の世界ではなく、彼女たちが選んだ世界を応援していきたい」と発言しました。

生活困窮者自立支援全国ネットワークの奥田直志さんは、連携関係の支援とつながりが支援の両輪と中間報告に言われたことに触れ、「ホームレス支援法から17年が経ち、ホームレスの人数が減ったことで評価をされているが、右側の被害者、避難所に来たホームレスの人数のなかに押し返した自治体があった。民生社会という大元をしっかりとつくる必要がある」と話しました。

生活困窮者自立支援全国ネットワークの宮本太郎さんは、「4者は首肯も首肯も認めていたはずなのに、見事なハーモニーを奏でていた。明るく話ばかりではないが、光を感じたと締めくくりました。

伊豆丸剛史氏 (長崎地域生活定着支援センター 所長)

大塚 雄一さん (伊豆丸剛史氏)

大塚 雄一さん (伊豆丸剛史氏)

参加者の声

伊豆丸剛史氏 (長崎地域生活定着支援センター 所長)

伊豆丸剛史氏 (長崎地域生活定着支援センター 所長)